令和４年度　教育事業（「地域の実情を踏まえた体験活動事業」（特色化事業））

第１３回　チャレンジカヌーツーリング

１　事業概要

国立大洲青少年交流の家において中心的なプログラムであるカヌーを通じて、教育テーマである「やり抜く力の育成」を目指した教育事業である。今年度は昨年度からコースを一部変更して３回実施するとともに、愛媛大学教育学部の日野教授に講師を依頼し、効果的なプログラムや指導法について検証を行った。

２　事業の目的（ねらい）

初めて体験するカヌーツーリングを通して、困難なことにも積極的に挑戦する姿勢を養い、やり抜く力の育成を図る。また、肱川流域の自然や歴史的文化遺産に触れることで、郷土を愛する心を育成する。

３　企画のポイント

昨年度の事業後のアンケート結果から「コミュニケーション力」における満足度が低いことが課題として挙がっていた。そこで、今年度は講師の日野教授に助言をいただきながら指導案を作成し、コミュニケーション力を高めるための指導法やプログラムを取り入れるよう工夫した。また、事業を通して参加者の変容を見取るために、新たに事前・事後（直後と１か月後）アンケートを作成し、事業実施による効果の検証を行った。さらに、ゴール地点を変更し、臥龍山荘や大洲城付近を通るコースに設定することで、肱川流域の自然だけでなく、歴史的文化遺産にも触れられるコースとした。

４　主　　催　独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大洲青少年交流の家

５　共　　催　大洲市・大洲市教育委員会・大洲市カヌー協会

６　後　　援　国土交通省四国地方整備局大洲河川国道事務所・愛媛県教育委員会

７　期　　日

第１回：７月 23 日（土）　第２回：８月　７日（日）

第３回：８月 27 日（土）　予備日：９月　３日（土）＊予備日は実施せず。

８　場　　所　大洲市菅田町父橋～大洲市中村緑地公園付近　　約５km

９　対　　象　小学５～６年生とその保護者

10　参 加 者 数（応募者数）

第１回：13 組 26 名（34 組 71 名）　第２回：17 組 39 名（58 組 129 名）

第３回：14 組 29 名（40 組 84 名）

11　参　加　費　１，０００円

12　講　　師　愛媛大学教育学部　教授　日野　克博　氏

大洲市カヌー協会会員

国立大洲青少年交流の家職員

13　指導案

チャレンジカヌーツーリング　指導案

1　日　時　第１回：７月２３日（土）　第２回：８月７日（日）
　　第３回：８月２７日（土）　予備日：９月３日（土）
2　場　所　午前：交流の家→艇庫→艇庫前河原　午後：艇庫→父橋→緑地公園→交流の家
3　ねらい　初めて体験するカヌーツーリングを通して、積極的に挑戦し、やり抜こうとする力の育成を図る。
4　準備物　指導者：艇庫鍵、無線機、計測グッズ、AED、救急バッグ、クーラーボックス（OS1、氷、氷嚢）
　　地図、ガムテープ、マジック、ライフジャケット、ヘルメット、カヌー、パドル
　　緊急車両に乗せておくものとして、AED、救急バック、クーラーボックス、担架、毛布
5　展　開

活　動	時間	○指導者の声掛け　●子どもの予想される反応	留　意　点
1　受付・更衣	9：00		
2　開会式 (1)所長挨拶 (2)スタッフの紹介 (3)やり抜く力の説明 (4)日程の説明	9：30	○「やり抜く力」について説明します。 ○最後のゴール（片付含む）までがんばろう！ ●事業への期待が高まる。	・小学生でも分かるように説明する。 ・子供たちの気持ちを高めるような演出（例えば笑顔でカヌーに乗艇している参加者の写真の提示等）をする。
(5)アイスブレイク		○自分のすきなものをお題にして、キャンプネームも含めて自己紹介をしよう。 ●恥ずかしがりながら自己紹介をする。	・参加者の緊張をほぐせるよう職員が積極的に声掛けする。
(6)班の目標設定		○班のみんなが最後のゴール（片付含む）までやり抜けるよう、班の目標を決めよう。 ●仕切ることができる子供が班内にいなければ、なかなか意見がでない。	・班の中で意見が出づらいようであれば、職員が子供からがんばりたいことを聞き出し、班の目標とする。
（バスで艇庫へ移動）	10：15		
3　平水体験 (1)準備・運搬	10：30	○班で協力してカヌーを運ぼう。 ●重いカヌーを途中休みながらも懸命に運ぶ。 ○パドル操作の仕方について、ペアで教え合おう。	・班員のカヌーを皆で協力して運ぶよう職員が励ます（必要に応じて職員や協会員も運搬に手を貸す）。
(2)平水体験 ・パドル練習	11：00	●指導者から教わったことを真剣に相手に伝える。 ○ライフジャケットとヘルメットをペアで確認しよう。	・熱中症対策として、足首や手首を水に浸けさせる。
・装備の確認	11：20	●職員に教えてもらいながらペアで確認する。	・職員が最終点検を行う。
・乗艇	11：30		
・隊列確認	11：45	○２列⇔１列になろう。 ●慣れないながらも隊列変更を試み、徐々に隊列を整えて移動できるようになる。	・職員は子供達の乗艇技術を見極める。
・カヌー運搬		○班で協力してカヌーを運ぼう。 ●重いカヌーを途中休みながらも懸命に運ぶ。	
・振り返り・午後の日程確認	12：10	○午前のカヌーを振り返ってみてどうだった？ ●運ぶのは大変だったけど、楽しかった。	
（昼食）	12：30		
（バスで父橋へ移動）	13：30		
4　ツーリング体験 (1)準備・運搬	13：45	○班で協力してカヌーを運ぼう。 ●重いカヌーを途中休みながらも懸命に運ぶ。 ○ゴールを目指してがんばるぞー！！	・艇の前での待機、入るタイミング、艇の途中でのパドリング、抜けた後の待機等について知らせておく。
(2)ツーリング開始	14：00	●「えい、えい、おー！！」 鵜飼プラザ前でトイレ休憩。	・ツーリングに向けてやる気を高めさせる。 ・トイレ：鵜飼プラザ
（休憩） (3)シットイン・スタンドアップカヌーについて説明する。	14：30	○シットイン・スタンドアップカヌーについて説明するよ。だれが座って、誰が立つ？ ●戸惑いながらも、班で立つ人、座る人を決める。	
（再出発）	14：45		
(4)班でシットイン・スタンドアップカヌーに挑戦し、写真を撮る。	15：15	○班でシットイン・スタンドアップカヌーに挑戦してみよう。 ●おそるおそる挑戦する。	・如法寺河原から臥龍山荘をバックに写真を撮る。 ・成功したら、しっかりほめる。
(5)緑地公園着	16：00	○大洲城が見えてきたよ。もう少し！ ●表情が明るくなる。	・肱川橋の下をくぐるとゴールであることを伝える。
(6)片付	16：15	○最後まで皆で協力して片付けよう。 ●疲れてはいるが、協力してカヌーをトラックに積み込む。	・最後までみんなで協力して片付けるようスタッフは声掛けをする。
（バスで移動）	16：30		
5　閉会式	16：45	○振り返りをしよう。	・班で円になって感想を発表し合い、拍手で互いの頑張りを認め合う。
6　更衣・解散	17：00		
研 究 の 視 点		・コミュニケーションの場の設定や職員の働きかけは適切か。 ・コミュニケーションの場の設定や職員の働きかけがやり抜く力の育成に効果があったか。	

【研究の仮説（案）】コミュニケーションの場の設定や職員の働きかけを適切に行えば、やり抜く力の育成につながるであろう。

14　日　　程

９：00　受付・更衣
９：30　開会式・アイスブレイキング
　　（仲間づくり）・移動（バス）
10：30　カヌー体験
12：00　昼食・休憩・移動（バス）
13：00　ツーリング（約５Km）
16：30　移動（バス）・閉会式
17：00　更衣・解散

15　活動内容

（１）　開会式と導入（目標設定・アイスブレイク等）

各回において、やり抜く力を伸ばすのに必要な要素として６つの力について説明した。さらに、実施の直前と直後、１か月後にアンケートをとることを参加者に伝え、協力を呼び掛けた。

開会式後は、班ごとに自己紹介やアイスブレイクを行って緊張をほぐすとともに、バディや班で頑張ること（目標）を共有し合うことで、コミュニケーションを取り合う場を設定した。また、第１回の反省を踏まえ、第２回・第３回では目標を紙に書いて掲示板に貼ることで、目標を可視化し、目的意識をしっかり持てるようにした。

（２）　カヌー体験　　講師：国立大洲青少年交流の家職員

バスで艇庫に移動し、バディで協力しながらカヌーを運んだ。一人一艇のカヌーを使用するので、各バディが艇庫から河原までを２往復した。小学生や女性の保護者にとって、およそ 20Kg の重さのカヌーを運ぶのは大変だったと思われる。しかし、やり抜く力を育成する上で、仲間（バディや班員）で協力して準備や片付けを行うことは大切であると考え、職員もで

きる限り運搬を手伝わずに、頑張りを認める声掛けを積極的に行った。

カヌーの運搬が終わると、河原でライフジャケットを着用し、熱中症予防のために手首・足首を水につけたり水に浮かんだりした。その後、パドル練習を行い、カヌーの乗り降りや転覆した際の対処方法について説明した。ライフジャケットの確認やパドル練習でも、親子ではなくできるだけバディで行うようにし、コミュニケーションを取り合う機会を確保するようにした。

リバーサインの確認後、基本的な操作に慣れるように流れが穏やかな場所で１時間余り、カヌー体験を行った。多くの参加者がすぐに慣れて、楽しそうにカヌーに乗る姿が見られた。

（３） 午前中の振り返り　　講師：国立大洲青少年交流の家職員

昼食前に、班ごとに午前中の活動を振り返り、バディで互いの頑張りを認め合ったり、個人の目標を修正したりした。参加者からは、「思っていたよりもカヌーに上手に乗ることができてよかった。」「午後からはもっと頑張りたい。」といった前向きな声が聞かれた。

（４） カヌーツーリング　講師：大洲市カヌー協会会員

父橋に移動し、体調やライフジャケット等の確認を行った後、班で声を掛け合って気持ちを高めた。参加者は、瀬（流れが激しい所）にさしかかると力強くパドルを漕ぎ、瀬を抜けると歓声を上げたり笑顔を見せたりしながら、カヌーの魅力を思う存分に満喫している様子であった。

臥龍山荘の下を通過するとコースは終盤にさしかかり、序盤に比べて流れが穏やかになるため、疲れが見え始める参加者が多かった。しかし、眼前に大洲城が見えてくると参加者から歓声が上がったり親子で写真を撮ったりして、再び参加者に笑顔が戻ってきた。スタッフも、「肱川橋をくぐるとゴールだよ。もう少しだから、頑張ろう。」と声を掛け、全員がゴールできるよう参加者を励ました。

ゴール後には、大洲城をバックに班で写真を撮り、バディで協力して片付けを行った。参加者は疲れていたが、最後まで協力してカヌーを片付ける姿が見られた。

（５） 閉会式

ツーリング後、交流の家に戻って班での振り返りとアンケートの記入を行った。各班での振り返りでは、掲示板も活用しながら、個人の目標が達成できたかどうか、一人ずつ発表する時間を設けた。参加者同士、お互いの発表に真剣に耳を傾け、「がんばったこと」を全員で共有できる時間となった。アンケート提出後に完漕証を渡したが、ほとんどの参加者が満足感に溢れた表情で受け取っていたのが印象的だった。

16　参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

【事業満足度】（大人 49 名　　子供 45 名）

＊満足：89.0%　＊やや満足：10.0%　＊やや不満：0.0%　＊不満：1.0%

【直後の感想】

○　最初は不安だったけれど、意外と簡単だった。他のことにも挑戦したい。（子供）

○　充実感がある。子供の成長を見られてよかった。また参加したい。（保護者）

【１か月後の感想】

○　友達に優しくしたり協力したりできるようになった。最後まで何でもやるようになった。（子供）

○　弱音を吐く回数が減った。家庭学習を最後までやるようになった。手伝いが増えた。（保護者）

17　事業の成果

今年度は、やり抜く力の向上を調査するため、日野氏の助言によりGrit調査*を行った。**表１**では、Grit調査の質問項目１から４において、実施直後の数値（３回の平均値）が実施直前よりも上がっている。事業に参加したことで「やり抜く力」が向上したものと考えられる。なお、より客観的なデータの収集を目的として、保護者にも同様のアンケートをとった。保護者の結果も併せて以下に示す。

*藤原寿幸氏・河村茂雄氏の「小学生のGrit(やり抜く力)とパーソナリティとの関連」（日本教育心理学会第62回総会発表論文集（2020年））を参考にした。

表１ Grit調査 質問1～4の子供と保護者の回答変化（平均）	子供			保護者		
	直前	直後	変容	直前	直後	変容
1. 自分（子供）はがんばりやである。	2.91	3.14	0.23	3.22	3.26	0.04
2. 自分（子供）はどんなことにも一生けん命に取り組む。	3.13	3.16	0.03	3.08	3.19	0.11
3. 自分（子供）はむずかしいことやつらいことにも負けない。	2.64	3.07	0.43	2.85	2.98	0.13
4. 自分（子供）は始めたことはどんなことでも最後までやる。	2.82	3.16	0.34	2.64	2.92	0.28

また、第１回の実施後に振り返りを行い、日野氏より、「親子ではなく子供（バディ）同士の関係性を高めるための工夫が必要」との指摘をいただいた。そこで、第２回と第３回では、バディ同士の自己紹介やアイスブレイク、掛け声の練習等に十分な時間をとり、コミュニケーション力を高めるための手立てとした。それにより、下の**表２**が示すように、第１回と比べて第２回・第３回はコミュニケーション力が向上していることが分かった。参加者からも、「バディと仲良くなれてよかった」「バディに『だいじょうぶ？』とか声をかけられた」といった感想をいただけた。以上のことから、事業実施による一定の効果はあったと考察できる。

表２　コミュニケーション力についての回答

第１回（7/23）		第２回（8/7）		第３回（8/27）		第1回と第2・第3回平均の差	
子　供	保護者	子　供	保護者	子　供	保護者	子　供	保護者
2.38	2.62	2.75	3.11	2.71	3.14	0.35	0.51

18　事業の課題

表３　６つの構成要素に関する質問への回答（３回の平均）

	協働力	コミュニケーション力	チャレンジ力	安全対応力	実践力	省察力
子　供	3.58	2.63	3.81	3.56	3.93	3.47
保護者	3.51	2.95	3.81	3.17	3.87	3.38

昨年度からの課題であったコミュニケーション力を高めるための指導法やプログラムの開発を目指して取り組んだところ、上述のとおり一定の成果はあったが、**表３**が示すとおり、コミュニケーション力については他の項目に比べて数値が低かった。その要因の一つとして、バディ同士の相性だけでなく、技能や体力の差によって、ツーリングの際にコミュニケーションがとりづらかったことが考えられる。

本事業の目的は、関係機関と連携しながら特色あるプログラムを開発することで、地域から理解・認知され、研修支援や公立青少年教育施設等で活用されることを目指している。今後は、日野氏や他施設との情報交換を進め、２年間の成果と課題を踏まえて、研修支援でより多くの団体が活用できる半日プログラムの構築、カヌーだけでなく既存のプログラムも組み合わせた展開を検討するなどして、やり抜く力を高めていくためのよりよいプログラムになるよう努めていきたい。

（担当：主任企画指導専門職　徳田　義実）